



森のなかま

2011年 9月号

NO. 41 (継続186)

NPO法人かながわ森林インストラクターの会 <http://www.forest-kanagawa.jp> 発行人 久保 重明
〒243-0014 厚木市旭町1丁目8-14・グリーン会館 TEL046-280-4101・FAX046-280-4102

竹林整備技術研修会を開催

森林部会*部会長

浦野 稔



竹は木ですか？草ですか？ 「タケノコ掘り」と「タケノコ刈り」の違いは？ 竹林を絶やすのに最適な伐採時期は？ など知りたいですね。また竹を伐るのは、間伐など樹木を伐るのとは比べて危険が少なく容易なことからあまり学ぶということはないようです。今回は竹について知り、竹林管理の考え方と基本的な整備技術を理解し、その上で竹林整備を実践または指導する場合の基準となる考え方を私たちが共有することが目的でした。

7月30日(土)に川崎市多摩市民館での講義と生田榎戸特別緑地保全地区での実習を行いました。参加は、かながわ森林インストラクター18名、講師2名もかながわ森林インストラクターで、「日本の竹ファンクラブ」で活動している中元秀幸氏には竹に関する知見や管理について講義と実習指導を受け、また上記保全地区で活動されている団体との調整、会場設定等をお願いした「(財)川崎市公園緑地協会」の野牛雪子氏には保全地区の状況や川崎の里山ボランティア育成講座の内容などについて説明を受けました。

復習を兼ねて今回研修内容の要点を以下にご紹介します。

- (1) まずは竹林の調査・診断です。良い竹林とは：見通し良く明るい、直立し背丈の高い竹が多い、節間に白粉が付き稈の色が青い竹が多い、根元に皮の付いた竹がある、太さが揃っている、など。
- (2) 竹林の状態で ①雑木林や畑に侵食した竹を退治するには皆伐、時期は地下茎の養分が少ない7~8月が効果的。4年間は筍を除去する。 ②長年放置された竹林に初めて手を入れる時は、林床の整備、枯損竹、老齢や極小の竹を伐り、2~3年目は新しく生まれた若竹の保護を最優先、4年目には若竹も3年生まで揃い親竹になるので本格的な密度管理に移る。
- (3) 用途別竹林管理：地質や向きを考慮して次を目安に整備を進める。伐適期は全て10~12月。

	(景観保全)	(空間利用)	(竹材生産)	(筍の生産)
親竹密度 (100 m ² 当り)	40~50 本	40~50 本	40~50 本	15~30 本
伐る竹の年齢	5~8 年生	5~8 年生	4~6 年生	5 年生
残す竹の直径 (モウソウの場合)	12 c m	バラツキ	バラツキ	8~10 c m

(4) 竹の伐り方：以下を基本とするが、竹林所有者、管理者の意向を充分確認して行なうことになる。

1. 倒れる方向を確認、倒れる方向の反対側に鋸を入れる、大きく傾いている場合は、裂けるのを防ぐために受けを入れる。
2. 伐る位置は地際近く、堆積物を除去して、節の真上、なるべく2度伐りはしない。
3. 竹が倒れる前に周囲に大声で知らせ、安全を確認してから倒す。
4. かかり木の処理は押して倒すのではなく、根元を持って倒す方向と反対側に引く。このとき3~4m長さのロープを用意して使用すると楽ができ且つ安全上望ましい。
5. 枝を払う場合、鉋＝枝の付け根の下方から上に向け落とす、鋸（竹を材料として使用する時の推奨）＝枝の付け根から2本同時に切り落とす、枯れた竹では硬い棒状の木などを使って払い落とす。

(5) 伐採竹の整理：竹材置き場を作る、使用目的が決まっている場合は必要な長さで、通常は3m位に切り揃えて集積する。払い落とした枝は天地・裏表を揃えて竹材とは別の場所に集積する。

さて冒頭の残りの疑問、竹は木のような（＝木質化する、高くなる）、草のような（＝成長期が短い、形成層がない）ですが60~120年と長い開花周期で一生に一度開花して枯死するためイネ科草本といえます。モウソウの筍は掘って収穫、マダケは地上に出たものを収穫、という違いがあります。

竹林の荒廃が進み、それに伴い周辺への異常ともいえる繁殖が起きています。竹林整備の必要性が増大することが考えられる今、竹についてもっと関心を持ちたいと思いました。9月にも2回目の研修を行います。



きのこと放射能

千葉 慶一<7期>

8月のお盆が過ぎると、きのこ愛好家はソワソワとしてくる。9月に入り彼岸花が咲き出すころになると、天気予報が気になり、いつ雨が降るのか最低気温は何度か、雨の予報がつい待ち遠しくなる。週末前に雨でも降ってくると土曜日は少し早起きして、近所の公園にきのこ観察が例年のパターンだ。



今年も21世紀の森で恒例の「きのこの観察会」を10月1日(土)、2日(日)と開催するが「3.11」以降、きのこの状況が気がかりだ。

福島原発事故により放射性セシウムが神奈川県や静岡県でも検出され、放射能汚染が広がっている。1986年のチェルノブイリ事故から25年たつ今でも、輸入されるきのこ(乾燥ポルチーニ等)からセシウムが検出されるほど、その「寿命」は長い。セシウム137の半減期は約30年、ほぼ「0」になるまでには数百年かかる。

8月12日に福島県が発表した野生のきのこの放射線量の測定結果によると、チチタケから1^{kg}あたり3,200ベクレルのセシウムが検出された(食品衛生法の暫定基準値は、1^{kg}あたり500ベクレル)。特にセシウムは化学的にカリウムに近く、植物やきのこはセシウムを栄養源とみなし、よく吸収する。一方、同じ調査で野生のナラタケからは検出されなかった。チチタケからセシウムが検出され、ナラタケから検出されない、この違いはどうしてなのか?

チェルノブイリ事故以降のデータにより、きのこ類は野生のハーブやいちご(ベリー類)、ナッツ類と同様に放射性物質を吸収しやすいと報告されているが、きのこだけを見ると、どうやら菌根菌のきのこのほうが腐生菌のきのこよりも放射性物質を濃縮、吸収しやすいようだ。

菌根菌……菌と植物とが、植物の根の表面や内部に着生し、相互に栄養分の交換をする。

腐生菌……枯れた木や落ち葉などの植物や動物遺体を栄養源として生活する。

前出のチチタケは菌根菌、ナラタケは腐生菌。菌根性のきのこはチェルノブイリ原発の周辺国のデータでも放射性物質を吸収しやすいと報告されており、まさに福島でも同じ傾向が出てきている。共生する木の根の力を借りて、放射性物質を集め、子実体(きのこ)に蓄積していく。菌根性きのこの養分吸収のメカニズムが人間も含め生物を脅かすことになるとは、誰が想像できただろうか。

菌根菌の代表格はマツタケである。秋の味覚の王様と言われ、本州では主にアカマツの林に発生し、マツタケの菌糸とアカマツの細根が共生体を形成する。幸いなことに私自身、マツタケのシロ(発生場所)を知らないので心配する必要もないのだが、森林に自生するきのこの場合、校庭や畑と違い、土壌を剥離するなど放射性物質を除染しきれないので、問題は深刻だ。きのこ(菌糸を含む)に放射性物質が吸収されると、きのこの遺伝子は傷つけられる。外観上の奇形などは出るのだろうか? チェルノブイリ原発周辺では、樹木の中では針葉樹のマツが放射性物質の影響を受けやすく、特に樹木の先端部(成長点)では葉のねじれや、2葉が3葉になることなどが報告されている。

そして、今年もきのこの季節がやってくる。

21世紀の森の特長は、都市部の公園より樹木の種類が豊富で、自然の森林よりも人の手が入ることで太陽の光も差し込み、きのこにとっては好条件である。毎年の観察会では少なくとも50種類以上のきのこを見ることが出来る。21世紀の森で見られる主なきのこを菌根菌と腐生菌に分けてみた。

<菌根菌のきのこ>

アミタケ、アミハナイグチ、サクラシメジ、タマゴタケ(写真下)、ツバフウセンタケ

*21世紀の森では見たことがないが、毒きのことして知られるベニテングタケも菌根性きのこである。



21世紀の森の「きのこの観察会」で、毎年、一番人気のあるタマゴタケ。成菌(上)と幼菌(下)。成菌の柄の下には卵状のつぼが見える。

<写真提供 千葉慶一 様>

<腐生菌のきのこ>

ゴムタケ、カラカサタケ、ノウタケ、ホコリタケ、ムラサキシメジ



例年、観察会の昼食は、タマゴタケのバター炒めや、タマゴタケ入りの蕎麦を提供していたが、きのこの汚染状況がわからない今年は、栽培きのこを使った昼食となりそうだ。

私の認識

野鳥その91

高橋 恒通

今月は稀な冬鳥として北海道に渡来するシロフクロウ（漢和名；白梟、英名；Snowy Owl、体長L=60 cm）についてご紹介します。

名前の如く体色は♂♀共に白色がベースカラーですが、♂は全体が真っ白であり、翼の羽の中に点々と黒褐色斑が混じります。♀は白色地の頭上、背、翼、尾、胸そして腹部に黒褐色の斑が入ってます。斑は個体差あります。

♂♀共に顔は白色で虹彩は黄色、翼は長目で先端は丸いそうです。

我国では厳冬期の海岸や草原の雪上でその観察記録が多いが、岩や杭の上でも観察されています。北海道ばかりでなく本州北部でも記録がありますが、いずれの場合も単独で生活している姿です。指まで白毛に被われています。

獲物はネズミやカモ類で、昼間でも狩をするそうです。この時には羽音を立て飛翔中の鳥類を襲って食べたりすると参考資料にあります。



シロフクロウ

シロフクロウの世界地図上での棲息域は、ユーラシア大陸、アラスカ、カナダの凍土地帯とグリーンランドの沿海部だそうですが、越冬で寒冷な地域へ来る個体の一部が北海道などで観察される訳です。

雪原に降りている時などは、丸い頭が恰も雪の塊と見間違いするほどだそうです。

我国で目撃できるフクロウ科の野鳥の中でシロフクロウは、後稿で紹介する予定のシマフクロウ、ワシミミズクに次いで三番目に大きい鳥です。故に何処か鈍重な感を抱かせますが、ゆっくり羽搏いて直線的に飛び、その飛翔速度が速いとの事です。

このような意外性のあるシロフクロウですが、私自身は残念乍ら未だに観ていません。若し機会があれば、以前に紹介させて頂いた白色のユキホオジロと一緒に目にかかりたいと思っています。

所で、ユキホオジロの白色は雪と氷の世界での身を守る保護色の役割ですが、

シロフクロウやシロハヤブサ（アイルランドの国鳥）の白色は、食物連鎖の頂点に位置する猛禽類の立場からすると、襲う相手に見付けられない為の保護色だと私は認識しております。

鳥類ではないですが、ホッキョクグマの体色も理由は全く同じだと私は思っております。

別の例で説明しますと、レーダー網に捉えられにくい“ステルス戦闘機”が存在しますが、自然界に於ける“ステルス性”を具備した生き物としてシロフクロウ、シロハヤブサそしてシロクマを私は認識しております。

これは造化の神の思し召しか、又は生物界の進化の過程の一現象なのか、私には大変に興味深い出来事なのであります。

余談ですが私達にとって、“白色”は神聖で純潔無垢を尊ぶ風潮がある為に、花嫁さんの白無垢姿、神様のお使いの白蛇、白狐、白鹿、白虎、そして神社などでよく見る白馬など枚挙に暇がありません。

野鳥の中でもシロフクロウやシロハヤブサの如き“ステルス性”とは無縁の白色の野鳥についても以下に挙げさせて頂きます。即ち“アルビノ”と称し色素の欠落が原因の白いカラスやスズメ、そして種として本来的に白い鳥、即ち徳島県の県鳥の“シラサギ”これは吉野川で多く見られるコサギ、チュウサギ、ダイサギを総称しています。更に青森県の県鳥の“ハクチョウ”これはオオハクチョウ、コハクチョウをひと括りにしています。そして島根県の県鳥の“オオハクチョウ”これは宍道湖に飛来するオオハクチョウです。いずれも“ステルス性”とは無関係だと認識しています。

<参考資料>

- ◎ フィールドガイド 日本の野鳥
野鳥ブックス② 高野伸二著
(財)日本野鳥の会
- ◎ 鳥630図鑑、
財団法人 日本鳥類保護連盟
- ◎ 日本の野鳥、山溪カラー名鑑、
編 高野伸二、解説 浜口哲一、森岡照明、
叶内拓哉、蒲谷鶴彦
山と溪谷社
- ◎ イラスト シロフクロウ 大塚晴子 (11期)

本の紹介

森林異変

田中敦夫 著

日本の林業に未来はあるか

堤 洋 <8期>



国産材が売れないのは高いから?、安い外材に押されたから?、外資が森林を奪う?・・・これら日本の森林に纏わる報道に惑わされ過ぎてはいないかという疑念に答えようと努力されている様子が伺える本です。一つには、近視眼的な報道に惑わされている面もあり、又、林業関係者の一方的な被害者意識が嵩じている面もありますが、それを冷静に指摘してあります。

本の構成は、序章、終章に本編四章で構成されています。国産材が市場から減った理由、漸く木材業全体が気づいたのと国際的な木材輸出制限の風潮から国産材へのシフトが始まっている現状、然るに森林を取り巻く林業の現状とその国産材を利用する林産業を含む林業以外の「街」の現実との意識・認識の乖離、最後にその森林と「街」を結ぶ手立てをまとめてあります。

疑問視した解は、決して外材が安い訳ではないし、林業・林産業側の問題や努力不足(企業という認識の欠如)もあった。外資が買収した森林は存在はしているが、外資の問題より日本の法制度と森林行政にも大きな問題を抱えている・・・という結末になります。

著者はその解決策として「大林業」という言葉でまとめています。その意味するところは「山を舞台に木材を生産するだけの狭義の林業ではなく、もっと森や木に関わる周辺の要素まで包含した広義の世界として認識する。言わば森と木に関わるトータルな世界」としています

かつて、林野も国交省も地山・治水に関して「流域管理」という概念を提示してきました。これは国土を人間が勝手に定めた法制度や行政界に捉われることなく、雨が海に流れ出るまでを一つのエリアとして認識し保全・整備していくことを言っていたと考えています。同様に日本を森から街へ大きく俯瞰して「雨」ではなく「木」に置き換えて考えてみれば「大林業」を提言した著者の意図が良く判ります。

(平凡社新書 760円+税)

活動短信

6/26～7/23

第2回「さとやま研修会」(下刈り)

日 6月26日(日)10時～12時 曇り
場 高石特別緑地保全地区(川崎市麻生区高石)
参 大人19名(男性16名、女性3名)
(川崎市広報誌などで募集した市民、公園愛護団体の会員)

主催 川崎市公園緑地協会2名、川崎市緑政課3名
川崎市公園管理課2名、麻生区役所2名、

イ L渡部⑦、相馬⑤、井口かおる⑧、一重⑩、大橋⑪、福島⑫、

6回シリーズ「さとやま研修会」第2回目、今回は公園予定地で3年前に植樹をした場所の「下刈り」作業。梅雨時であり集合時には昨日からの雨が小雨になり、作業開始時には幸い雨は上がった。

主催者挨拶後、インストラクターにより「下刈り」の必要性、鎌の使い方、「つる切り」方法の説明後、1班4～5名の4班を編成して班付きのインストラクターの指導により作業を開始した。

3年前にヒノキ、コナラ、クヌギ、モミジなどを植樹しているが同じ樹種が固まっていたり、やや密植状態の場所もあり、十分注意をしながら作業を進めてもらった。

草刈鎌を初めて使う参加者も数名いたため、担当インストラクターが大分苦労したが下刈りが予定より進行していたため、休憩後は成長の早い5年生前後の樹を選んで枝打ち作業を指導した。

足元が悪く暑い中、幸いにも負傷者・病人もなく無事作業を終了した。

作業後、インストラクターの指導により、鎌の研ぎ方、剪定鋏、鋸の手入れ方法を実習して、定刻通りに終了した。

今回の「さとやま研修会」のねらいに、安全管理に配慮した標準作業を体験させ、活用してもらう。初心者には近くの公園で活動する公園愛護団体、里山保全団体への参加を奨励する。ことであったが夫々成果は得られたものと感じた。(記 7期 渡部)

県民参加の森林づくり活動と体験講座

日 7月2日(土)8時40分～15時20分
曇り時々雨と時々晴れ

場 相模原市緑区鳥屋(水源林・魚止めの森)

参 一般県民 50名(男性40名・女性10名)

講師 佐藤好延氏(佐藤草木社長)

財 豊丸、初山、

イ L海野⑩、高橋③、塩谷⑦、清水⑧、村井⑨、波多野⑨、

今回の森林づくり活動と体験講座は、(財)かながわトラストみどり財団と相模原緑の協会との共催企画として実施された。天候はぐずつき気味であったが、気温があまり上がらず下刈りにはまずまずのコンディションであった。

小田急線本厚木駅前を予定通り出発し、途中「鳥居原ふれあいの館」でトイレ休憩と合流者4名を

ピックアップし現地へ到着。現地には、管理棟（施設）があり、参加者・主催者・インストラクターは管理棟の前に集まり、事前の注意事項・準備体操を行い、その後5班に分かれ作業現場へ向かった。現場は傾斜地を抱えた溪畔林内の広葉樹植栽地であり、旺盛な下草が植栽した苗木を隠してしまっていた。参加者は初心者が多く、全部を刈り終われるか懸念されたが、傾斜地の上部以外はほぼ刈り取ることが出来た。

一部の参加者は、作業中に見つけた空き缶やペットボトル等を自主回収してくれた。今後は作業中に回収したゴミの処分も検討する必要があるのではないかと感じた。（今回は、道具の回収と合わせて回収してもらった。）

作業終了後は佐藤好延氏による「森林資源の活用と水源地域の現状」の講座を受講。

講座は管理施設で行われたので、天候の心配もなくパソコンも使用でき良かったと思う。

インストラクターの反省会でのヒヤリハットの該当事項の報告はなかったが、ヤマビルの被害者2名と軽い熱中症1名の報告があった。

（記 9期 波多野）

平成23年度 川崎市里山ボランティア育成講座 第2回

日 7月9日（土）9時～15時

場 川崎市等々力緑地

参 一般市民による講座メンバー24名

スタッフ 川崎市公園緑地協会ほか 11名

イ L金森⑩、安部⑤、清水⑧、小林⑩、

全6回講座の第2回目。午前中は麻生消防署にて救急法を受講、午後は万福寺ふるさと緑地でアズマネザサの駆除を行った。梅雨明けしたばかりの猛暑で熱中症に気をつけながらの活動となった。救急法はガイドライン2005に対応した「応急手当講習テキスト」をもとに、心肺蘇生法とAEDの講義を受け、班に分かれて実習を行った。何回も繰り返し実習ができ身に付いた参加者が多かった。さらに、止血方法や熱中症対策の講義を受けて修了とし、川崎市消防局による普通救命講習修了証が全員に手渡された。昼食と午後の緑地への移動のため一旦解散とし、研修の一環として地図を頼りに緑地へ向かう、緑地を管理している市民団体から挨拶を聞き、ヘルメットなど道具を配布、鎌の使い方を基礎から学び笹刈りを開始する。広範囲にはびこった笹がみるみるうちに刈られてゆく。ヒサカキの剪定などを並行実習しながら、約1時間作業して終了。鎌の手入れの仕方を学ぶ。怪我や熱射病はなく無事修了。次回は10月8日（土）神庭特別緑地保全地区（高津区蟹ヶ谷）にて講義「里山の年間計画、イベント企画の立て方」、作業「竹林整備、竹の処理の仕方と活用法」を予定する。（記 10期 金森）

県民参加の森林づくり活動（下草刈り）

日 7月9日（土）8時～13時 晴れ

場 足柄上郡山北町谷峨

参 一般県民 25名

山北町森林組合 3名

財 内海課長、永島、 看 青木

イ L小沢⑨、佐藤①、小野⑦、柴⑩、吉田⑩、
上宮田⑩、

朝から気温上昇、夏本番の酷暑の中、3名の欠席がある他は皆さん元気にご参加頂き行列をなす富士登山ツアーを横目にバスは定刻に出発。

9時30分谷峨駅に到着後、サルスベリの木陰にてオリエンテーション・軽く体操を行う。リーダー、看護師より水分補給・休憩の重要性を説明頂く。

4グループに編成し現地に向け登ること10分。

山北町森林組合さんの車より、おのおのヘルメットと鎌を装備。さらに現場まで5分の登り、まだ作業前というのに皆汗だくである。コナラ、クヌギの苗木はクズ、ササ、シダ類に覆われ姿が見えず。

作業手順、危険因子（蜂の取り扱い、近隣との接近）を皆で確認し作業開始。今回の参加者は12期生も含め20代（？）男女の若者の姿が目立った。

下草刈り初体験の彼らを熟練（常連参加）の人生の大先輩たちが的確なアドバイスで作業に導く姿も見られた。植物・木々の名（由来）、特徴などの説明もはさみ「元気ですか～」と声を掛け合いながら、こまめに休憩をとり水分補給した。蜂の巣もなく体調不調者を出すことも無く無事作業を終えた。

（記 11期 上宮田）

パートナー林の保全活動

日 7月14日（木）10時～13時 晴れ

場 やどりき水源林

参 三菱重工業（株）相模原製作所

社員30名（男性23名、女性7名）

県 自環境水源の森林推進課 内田、後藤

イ L浦野⑧、小野⑦、波多野⑩、

参加者（事務系新入社員）に「かながわ水源の森林づくり事業」への理解を深める、水源林の機能を理解する、とのテーマに加えての実践活動である間伐作業のお手伝いをした。間伐の意義を解説したあと、10人づつ3班に分かれて作業に入る。現場は浮石の多い急斜面のため移動にも危険が伴い注意の声掛けが欠かせない。引率責任者を除いては全員初の作業体験。猛暑の中での作業だったが若さで元気に作業を進めてもらった。終了後の感想では「大変な作業だと言うことが分かった」が全てのよう。現場の状況と掛かり木の処理で苦労したことへの感想でしょう。やどりき水源林内のパートナー林のほとんどはこの現場と同様な状況なので参加者、インストラクターともに安全への配慮が欠かせません。そのことを参加の皆様にも理解いただき、寄沢で体を冷ましてからの解散でした。（記 8期 浦野）

「みどり・みらい・JA50の森」下草刈り

日 7月16日（土）10時～12時 晴れ

場 相模原市緑区鳥屋 鳥屋財産区森

参 県下JA職員 47名
県 自環水水源の森林推進課、内田、金子、
イ 清水③

平成9年に植栽したカツラ、ヤマザクラ（鹿の食害によりほとんど無し）、イロハモミジ、ヤマボウシの下刈り作業で、作業は簡単に終了した。14年が経過しているため、下刈り作業は今年で終了してもよいのではないかとと思われる。

へび、はち等の被害なし。ヤマビルは万全の対策をとったが、1人だけ代表して餌食となった。

作業は簡単であったが、水源を守る活動の意義を体験を通して実感していただいたと思う。

（記 3期 清水）

自然体験ツアー

“たたき網を持って、草むらで昆虫を探そう”

日 7月18日（月・祝）10時～15時
場 県立21世紀の森 森林館、木材工芸センター
 内山林道付近

参 27名（大人12名、子供15名）
スタッフ 足柄GS 木津、鈴木、渡辺、
イ 金森⑩、

昨年に続き2年目となるこのイベントは、年々虫好きの子供達が増えているのか、自然に対する興味が高まっているのか、募集して間もなく定員に達し、結局2倍の応募があり抽選となった。9時に現地に到着し、午後の昆虫観察現地を下見する。草むらがある場所の選択、蜂など危険動物の有無、木陰の確保など、入念に検討する。10時に参加者全員が集合、気合が感じられる。刃物の正しい使い方、上手な削り方を巡回しながら教える。竹を削り、磨いた時点で一旦チェックを受け、合格となれば網となる布をもらって完成させる。初めての子供も上手に刃物を扱い、怪我無く無事完成。昼食後、いざ昆虫探しに出発、たたき網の使い方を実演した後、約1時間自由に昆虫探し、捕まえた昆虫をみんなで共有する。小型の昆虫が約30種観察できた。森林館に戻り、観察できた昆虫の解説、たたき網の様々な使い道を提案する。おまけとして蟬の鳴き声（7種類）をパソコンとアンプスピーカーを使ってクイズ形式で聴かせた。参加者アンケートの結果は上々であった。

（記 10期 金森）

自然観察部会 <森林探訪・真鶴半島>

「巨木林と磯の花を訪ねて」

日 7月23日（土）9時半～14時半 晴れ
場 真鶴半島
参 一般募集 65名（男性38名、女性27名）
財 瀬戸、河野、
イ L松永⑪、友谷①、高橋③、野田⑧、女川⑨、
 小林⑨、海野⑩、小林⑩、上宮田⑪、鳥飼⑪、

連日の猛暑から一転して秋を思わせる気候となり、絶好の森林探訪日和です。参加者は65名とまざまざの人数で、JR真鶴駅より乗り合いバス増発便2台に分乗して中川一政美術館前下車。

お林展望公園の木陰にてオリエンテーションの後、1班から7班まで順次スタート。お林遊歩道に入ると300年以上の樹齢のクロマツとクスノキの巨木が目飛び込んできます。いつも思うことですが巨木の前に立つと自然の偉大さを感じるのには私だけでしょうか。お林の林床に生えているイヌビワとイヌビワコバチの関係は非常に巧みな共生関係であり自然の不思議を感じます。番場浦遊歩道より海辺の植物となりオオアリドオシ、オオムラサキシキブを観察して、潮騒遊歩道に入ります。ツルソバ、ハマゴウ、スカシユリ等の海岸に生える植物を観察し、ウメボシソギンチャクは台風の影響により波が高く数匹しか確認できませんでした。午後は再度お林の巨木林の中を散策して、コショウ科のフウトウカズラを観察し里地まで歩いて本日の森林探訪は無事終了しました。最後に里地から真鶴駅までインストラクター全員と希望者13名が歩いて車で解散してようやく全終了となりました。

（記 11期 松永）

県民参加の森林づくり（下草刈り）

日 7月23日（土） 晴れ
場 秦野市堀山下ほか（全国植樹祭植栽地）
参 一般県民 99名
財 内海課長、古舘、永島、**用具準備** 石鍋
看 青木
イ L堀江④、竹島③、渡辺③、柏倉④、北村⑥、
 鈴木隆⑥、愛木⑦、浦野⑧、草野⑧、松本⑧、
 飯澤⑨、宮向井⑨、村井⑨、高橋⑨、後藤⑩、
 中元⑩、宮下⑩、大橋⑪、吉田⑪、福島⑪
 松本⑪、山下⑪、一重⑪、**研** 柴⑪、佐藤義⑪

本日の下刈り場所は、昨年の全国植樹祭で植栽された場所であり、どれだけ苗木が大きくなっているか、期待と不安で参加された方も多かったのではないかと思います。実施日の週は台風の影響で雨や曇りの日が多く、当日の天気を心配していましたが、幸いに太陽が出る天気となり、約100名の参加者が秦野戸川公園パークセンター前に集合しました。

恒例の作業説明、注意事項の説明、体操を行った後、班別に作業場所へ移動し各持ち場に分散。最初は予想より草の成長が早いと感じられ、植栽木の確認も難しく大変な作業になりそうな予感がしましたが、グループ毎に作業を進めてみると思ったより植栽木も根付いていました。（80%位）

しかし、成長の早い木と遅い木の差は大きく、特に小さい木はつるにも巻かれ懸命に頑張っているようで、丁寧につる切り、整地をしていただきました。この地域はヒルの被害も多く、作業前より忌避剤を用意するなどの対策を行いましたが、吸血された方が5名と被害もありました。また、ハチの被害もあり2名の方が青木看護師の治療を受けることになりました。暑い中の作業、ヒル、ハチの被害もありましたが、作業前の藪が綺麗に刈られ、植栽木が胸を張って立っているように見え、参加の皆さんも満足して頂けたのではないかと思います。（記 9期 高橋）

**やどりき水源林
ミニガイド**

8月のトピックス



8/19 県の水生調査に参加・11名

9月の水源林



種の饗宴が始まります。(ネム)

「森の案内人」情報

- 実施時間：毎週土曜・日曜・午前10時・午後1時1～2時間程度(12月1月2月休止)
- 集合：水源林入口ゲート前
- 内容：森林インストラクターが自然観察にご案内します。森林のしくみ・手入れなどについて説明いたします。参加自由、参加費無料
- *10人以上の団体は事前に下記までご連絡ください。
- 問合せ：(社) かながわトラストみどり財団 TEL:045-412-2255
fax:045-412-2300
- ホームページ：<http://www.ktm.or.jp>
- E-mail:midori@ktm.or.jp
- やどりき水源林までの道順
小田急線新松田駅または JR 御殿場線松田駅下車、富士急湘南バス「寄(やどりき)」行き乗車約25分。バス下車後(案内板あり)川沿いに徒歩35分。寄大橋の右横が水源林ゲートです。

イベント情報 & ご案内

H23年・野生動物写真コンテスト
「自然界に生きる野性動物たち」
応募締め切り 2012/1・10

どなたでも応募できますが、応募票が必要なので、ご希望の方は広報部・村井までご一報頂ければお送りします。
・撮影時期、応募点数に制限なく既発表作品も可とします。他のコンテスト入賞・入選作品とそれに類似した作品は応募できません。詳細は応募される方へお送りする応募票をご覧ください。
主催：一般財団法人自然公園財団
写真コンテスト係り

◇森のなかま原稿募集◇

会員・購読の皆様からの原稿を募集しています。<広報全般についてのお問い合わせ>

小沢章男まで

Mail;a_ozawa@tbz.t-com.ne.jp
Tel:0467-52-2191

送り先

<①電子配信担当> 森 義徳
〒232-0053
横浜市南区井土ヶ谷下町16-3-202
Tel/090-5433-7784
Mail:shinrin.inst.denshihaishin@gmail.com

<②メール・手書き原稿送り先>
【本誌】村井正孝
〒226-0002
横浜市緑区東本郷6-22-1-420
Tel/Fax:045-476-4112
Mail:murapu60dai@yahoo.co.jp
【別冊】水口俊則
〒250-0871
小田原市下堀123
Tel/Fax:0465-42-7240
Mail:minagold109@yahoo.co.jp
【CCで】竹島 明
〒238-0045
横須賀市東逸見町3-7
Tel/Fax:046-825-9281
Mail:2nahemi0818@jcom.home.ne.jp
原稿は随時受け付けてます。

編集後記

★今年も異常な天気だ。早かった梅雨入り、猛暑の連続、お盆の後は、いきなり涼夏早くも秋の装い、でも、自然界は、着実に秋を迎える準備が、目につく。節電に努力する人の知恵も成果を上げた。間もなく秋だ。会報発行、参ります。ビールうまし。(鈴木松)

★ゴーヤを見ていると、まっすぐなひげがネットに絡みつくどくるくるねじれ「巻きひげ」になる。しかもよく観察すると途中から「巻き」が逆回転になっている。何か理由があるのだろうが、植物には不思議が一杯。(井出)

★8月の後半は天気がいまひとつで残念！涼しいのはいいのですが、やはり夏らしくまぶしさがほしいですね。(水口)

★久しぶりに箱根・湯坂路を歩いてきました。アサギマダラが優雅に飛び舞っていました。(村井)



◇年間購読のお申し込み

「森のなかま」年間購読をご希望の方は、郵便局備付けの郵便振替を利用してお申し込みください。
郵便振替口座 00230-0-2454
かながわ森林インストラクターの会宛まで購読料年2000円をお振込みください。
振替用紙には、必ず、住所、氏名を明記してください。
振替用紙到着の翌月号から12回/1年間お届け致します。
(領価 200円 送料共)

～ キノコの自然観察会 ～ 講師 千葉 慶一 (7期)

森林インストラクターのガイドで、県立21世紀の森を散策しながら秋のキノコを観察し、キノコを使ったそばを楽しもう！

- ・10月1日(土)・2日(日) 10時～15時
- ・各日、小学生以上15人(抽選) 小雨決行
- ・会費(昼食代込み) 1000円 締め切り9/21
- 申し込み・問い合わせは：E-mail k21seiki@ak.wakwak.com tel:0465-72-0404
県立21世紀の森・管理事務所まで



編集人：村井正孝

事務局：竹島 明
広報部：小沢章男 井出恒夫 (HP)
水口俊則 森 義徳 真貝 勝
鈴木 朗 鈴木松弘 大塚晴子
天野里美